# 紹介

## 澤田典子著
## 『アレクサンドロス大王
### ――今に生き続ける「偉大なる王」――』

わずか一〇年で「世界征服」を成し遂げたアレクサンドロス大王。二〇〇〇年以上前のこの偉人を巡って、現代でもマケドニアとギリシアは一種の緊張関係にあるが、本書は冒頭でこのマケドニア問題を取り上げる。遠い過去の人物が現代の国際問題に影響を与えている状況には、違和感を覚える人もいるかもしれない。本書はその違和感を歴史学の立場から説得的に解明するため、古代のアレクサンドロスの実像に迫るだけでなく、彼に魅了された人びとに着目して現代に至る受容にまで射程を広げていることが特徴である。

第一章「アレクサンドロスの征服と野望」は、彼の生涯を史実に即して追っていく。アレクサンドロスが誕生する前のマケドニア王国のギリシア世界における位置づけ、父フィリッポス二世の治世および暗殺、そして幼少期から登位、東方遠征について、短いながらも要所を押さえており、まさに伝記と呼べる章になっている。他方で、後のイスラーム世界におけるアリストテレスとアレクサンドロスの師弟関係の受容や、ギリシア側の史料によるペルシア帝国の国力の過小評価にも言及しており、一個人の伝記に留まらない視野の広さを窺わせる。

続いて第二章「父と子」は、特にアレクサンドロスとその父フィリッポス二世の関係に焦点をあて、アレクサンドロスの実像への接近を試みる。アレクサンドロスは父から「遺産」として精強なマケドニア軍、当代随一の軍事技術、そして東方遠征という野望を受け継ぎ、彼を範と仰いだ一方、彼を「ライバル」ともみなしていた。本章は、こうした父子の「相剋」の文脈で、側近のクレイトス刺殺事件やアレクサンドロスの「神の子」という主張を読み解こうとする。すなわち、近年のフィリッポス二世の再評価を組み込むことで、英雄的な大事業の背後にあったアレクサンドロスの人間的内面を汲み取ろうとしており、彼が身近に感じられる章となっている。

以上で明らかにされたアレクサンドロスの実像を踏まえて、第三章「幻影のアレクサンドロス」では、アレクサンドロスが後世にどのように受容されたのかを扱う。神話化は彼の生前から始まっていたが、その死後、彼のイメージはますます「実体」から遊離した「幻影」となっていく。そうした多様な「幻影」は史実からかけ離れているものの、後世の人びとの信条や理想、世界観を映す鏡としての役割が本書では積極的に評価される。

一方、史実を追い求める歴史研究においても、ある時は理想的な英雄、またある時は無責任な王というように、歴史家の生きる時代によって両極端な解釈がアレクサンドロスについてなされてきた。本書は、近年のミニマリズム（最小限評価主義）の行き過ぎにも懸念を示したうえで、いわゆるヘレニズム文化が発展する場の形成と各地での大虐殺といった「世界征服」の功罪、そしてアケメネス朝の「継承者」という点にアレクサンドロスの事績を集約させている。

第三章からもわかる通り、本書は西洋史研究者の手による他の類書に比べてアレクサンドロスの受容を大きく扱っている。従

来のアレクサンドロス研究の手法は、あくまでも「幻影」から「実体」を抽出しようとしてきた。そうした研究が進展したからこそ、今度は「実体」が「幻影」へと変化していった過程にも目を向ける余地が開かれたのだろう。本書は、アレクサンドロス研究の新しい一歩を象徴している。また、受容に注目することで、本書が主に想定しているであろう、専門家でない読者にも、西洋古代史の現代に与える影響力がひしひしと感じられるのではないだろうか。それを意図しているのであろうが、本書は全体の結論部分で、再び現代のマケドニア問題に立ち戻る。アレクサンドロスの実像と受容の二つを扱ったことで、過去の「実体」だけでなく、時代に応じて変化した過去の「幻影」もまた現代の人びとに影響を及ぼしていることが理解でき、当初の違和感は払拭されるだろう。と同時に、読者は変幻自在で一面的には捉えきれない過去と、どのように向かい合えばよいのかという新たな問題に直面するに違いない。本書は、遠い過去を対象としながら、我々が生きる現代についても一考を促してくれる一冊である。

（A5変型判　九六頁　二〇一三年四月
山川出版社（世界史リブレット人005）
税別八〇〇円）

（岸本廣大　日本学術振興会特別研究員DC・
京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

## 受贈誌

（二〇一三年四月二五日～
二〇一三年七月一八日）

専修史学（専修大学歴史学会）五四
国家學會雜誌（国家学会事務所）一二六―
三・四
日本塩業の研究（日本塩業研究会）三三
東洋史研究（東洋史研究会）七一―四
正倉院紀要（宮内庁正倉院事務所）三五
神道宗教（神道宗教学会）二二六・二二七
神道宗教（神道宗教学会）二二八
大東文化大学漢學會誌（大東文化大學漢學
会）五二
東北文化研究室紀要（東北大学文学研究科
東北文化研究室）五四
Historia Mexicana（El Colegio De Mexico）
二四七
東洋大学文学部紀要　史学科篇（東洋大
学）三八
日本学刊 JAPANESE STUDIES（中国社
会科学院日本研究所中華日本学会）二〇
一三・二
成大歴史學報（國立成功大學歴史學系）四
三